



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



トキと能登

放鳥式で放たれたトキと石川県のトキスーパーパイザーの村本義雄さん（中央）。羽は個体識別のため着色されている=5月31日、石川県羽咋市

撮影：嶋田 達也（朝日新聞社映像報道部）

この6月26日、日本代表はW杯1次リーグを突破した。もはや驚きも、歓喜というほどのものもなかったところに時の経過を感じる。こんなことを振り返ったのは、同じ日に国際原子力機関（IAEA）のグロッシ事務局長の会見があったからだ。控室で司会の半沢隆実・企画委員（共同通信）は、W杯でのメッシの活躍をたたえた。アルゼンチン出身のグロッシさんは「私は何もしていない」と言いつつ、1次リーグを突破した日本代表の次の一戦について触れた。半沢企画委員が「公式コメントですか」と突っ込むと、「私のキャリアが終わってしまう」と笑ったので、そのコメントをここで明らかにするこ

とはしないでおく。
（専務理事 江木慎吾）

昔はサッカー少年だった。ワールドカップは1970年メキシコ大会から見ていた。イングランドを応援したが、ベッケンバウアーやミュラーがいた西ドイツに敗れた。この大会の主役は王様ベレだった。ブラジルにはリベリーノやジャイルジーニョもいて、W杯3度目の優勝を果たした。その後も週末のテレビのダイヤモンドサッカーを楽しみにした。

十数年して大学の野球部に所属し、千葉県の検見川グラウンドで合宿した。同じ施設に森孝慈さん率いるサッカー日本代表が合宿していてびっくりした。野球部側は盛り上がったが、大学野球部と同じ施設で合宿するのが、W杯をまだ見ぬ当時のサッカー日本代表の置かれた立場だった。

大学野球部と同じ施設で合宿
サッカー日本代表の驚異的歩み

国際機関・外国の要人 最初の四半期、 会見活発に

年度最初の四半期は国際情勢、国内の政治情勢を受けた記者会見が多くあった。シリーズとしては「イスラエル・米の対イラン攻撃」を8回、「高市現象と日本の政治」を9回、「どうなる成年後見」を3回、「給付付き税額控除と社会保障」を3回、「2・0」人口減少時代を生きる「アメリカ建国250年」を2回ずつ展開した。そのほか、シリーズにはなかったものの、「移民・難民からみた世界情勢」「史上初のAI戦争」「再審制度見直し」をテーマにした会見があった。

国連機関の要人登壇が相次いだ。国連事務次長の中満泉さん、国連開発計画(UNDP)総裁のアレクサンダー・ドゥークローさん、経済協力開発機構(OECD)事務総長のマティアス・コーマンさん、国連事務総長のアントニオ・グテレスさん、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)事務局長代理のクリスチャン・ソンダースさん、そして国際原子力機関(IAEA)事務局長のラファエル・マリアーノ・グ

ロッシさんが登壇した。

国連以外でも駐日スペイン大使のイニゴ・デ・パラシオ・エスパリーニさん、タイ副首相兼外相のシーハサック・プアーンゲートゲオさん、カナダ国防相のデービッド・マクギンティさんをゲストとして迎えた。

カンヌ国際映画祭で女優賞を受賞した、「急に具合が悪くなる」の岡本多緒さん、ヴィルジニー・エフィラさん、そして監督の濱口竜介さんの会見は、受賞直後とあって多くの人を集めた。東京都小笠原村村長の渋谷正昭さんも、核のゴミの処分地選定に向けた文献調査が南鳥島で実施される見通しとなったことを受けて登壇した。

このほかに記者クラブの行事として山中伸弥さんの総会記念講演と、日本記者クラブ賞・同特別賞の受賞記念講演会もあった。

会見出席者は増加傾向 動画視聴数は伸び悩み

企画委員が精力的にゲストに働きかけ、タイミングよく開催できた会

見が多かった。それが、会見の出席者の数字にも表れている。

出席者が会場・オンライン合わせて100人以上となった会見は15件あり、25年度の総数をすでに上回った。「急に具合が悪くなる」の会見が178人と最多で、グテレス国連事務総長が146人と続いた。また、「高市現象と日本の政治」のシリーズへの関心も高かった。

出席者を多く集めることばかり狙っているわけではないが、記者に関心をもってもらい、報道を通じて人々の知る権利に資するという目的からすれば、多くの参加者があるがたい。25年度は記者会見の平均出席者が71人と、前年度から減っていたが、26年度はこれまでのところ80人を大きく超えている。この勢いを維持していきたい。

一方、少し心配なのが会見動画の視聴回数だ。24年度の平均視聴数が1万回を超えていたが、25年度は半分近くに、今年度はさらに減っている。視聴10万回を超える動画が、出にくくなったように思える。注目を集める会見の動画が、自前で放送する会員社のサイトで視聴されるといいうジレンマとともに、競合メディアが多数あることや動画の長さも影響しているのかもしれない。(江木)

目次

▼今月のクラブゲスト

3/4

▼会見レポート

4/8

カンヌ国際映画祭女優賞受賞「急に具合が悪くなる」会見／山中伸弥 京都大学iPS細胞研究所名誉所長、京都大学iPS細胞研究財団理事長／パトリック・デニーン 米ノートルダム大学教授／シーハサック・プアーンゲートゲオ タイ副首相兼外相／久保文明 前防衛大学校長／秋元千明 英国王立防衛安全保障研究所(RUSI)日本特別代表、特別名誉フェロー／デービッド・マクギンティ カナダ国防相／ラファエル・マリアーノ・グロッシ 国際原子力機関(IAEA)事務局長

▼記者セミ

8

▼ワーキングブレス

9/11

京都府南丹市の男児殺害事件 京都新聞社 富田芳夫
辺野古「教育基本法」違反 共同通信社 国分伸矢
今村聖 奈騎手 JRA女性初のGI制覇 スポーツニッポン新聞社 寺下厚司

▼書いた話書かなかった話 サッカー界の哲人が語った 人権と差別と「移民の現実」

12/13

高田昌幸

▼リレーエッセー

14

山野千枝さん ベンチャー型事業承継代表理事 産経新聞社 高橋寛次

▼マイBOOKマイPR

15

▼写真回廊

18

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



なが た ゆう
永田 祐さん 同志社大学教授



「成年後見制度」を見直す民法改正案の審議が国会で進んでいる。「制度が終了した場合に想定される必要な支援は、現状では不十分な可能性が高い。福祉側の体制として、判断能力が不十分な人を支援する制度の創設を含め、総合的な権利擁護支援策を再構築する必要がある」

■ 5・29/出席：会13人、オ43人/「どうなる成年後見」①
/司会：小林伸年委員

すみた あつこ
住田 敦子さん 尾張東部権利擁護支援センター「あすライツ」センター長



「代理権、同意権、取消権は自己決定への制約だと捉えなければいけない」制度が変わっても、本人が分からないからと説明を省略し、必要性を吟味せず多くの代理権をつければ今と変わらない。本人が意思表示できない場合は支援者が必要性を吟味できるかが大事だ」

■ 6・10/出席：会9人、オ20人/「どうなる成年後見」②/
司会：小林伸年委員

あかぬま やすひろ
赤沼 康弘さん 弁護士



成年後見制度の改正について、「補助制度に統一されるが、現場では判断能力が低下した人の保護、財産保護を重視する意識が強い。本人の意思を尊重できるかどうか、補助人の意識改革が必要」。「金融機関が制度の利用をやめた人の取引の再開をどこまで認めるかも課題だ」

■ 6・16/出席：会9人、オ20人/「どうなる成年後見」③/
司会：小林伸年委員

きうち たかひで
木内 登英さん 野村総合研究所エグゼクティブ・エコノミスト



「原油価格の上昇幅は第一次オイルショック時よりも小さいが、原油・ナフサの輸入減少幅は格段に大きい」「代替ルートでの調達を持続的に続けられるかは明らかではない。日本以外の主要国はほぼ需要抑制策を講じている。需要側の政策に着手することが重要だ」

■ 6・2/出席：会31人、オ57人/「イスラエル・米の対イラン攻撃 背景と影響」⑩エネルギー危機の日本経済への影響と政策対応/司会：今井純子委員

みまき せいこ
三牧 聖子さん 同志社大学大学院教授



「イスラエルの強力な働きかけに動かされた大統領によって、なんの利益もない戦争が起こってしまったという感覚は、党派を超えて米国で共有されている」「米国の若い世代ほどイスラエルを、圧倒的な軍事力でパレスチナ人を痛めつけてきた国家と見るようになっていく」

■ 6・22/出席：会43人、オ58人/「イスラエル・米の対イラン攻撃 背景と影響」⑪/司会：出川展恒委員

いま い ゆうすけ
今井 悠介さん チャンス・フォー・チルドレン代表理事



2011年、全国で生活困窮家庭の子どもたちの学び・体験の支援を行う公益社団法人を設立。子どもの体験格差の問題に触れ「体験保障を子どもの権利としてとらえるべきだ」「子どもの貧困の連鎖を断ち切るには体験を通して想像力・選択肢の幅を広げていくことが大切だ」

■ 6・5/出席：会13人、オ41人/「人口減少時代を生きる」⑪/司会：小林伸年委員

ふじさき いちろう
藤崎 一郎さん 元駐米大使



「日米関係は一大統領に左右されない」「トランプ主義は続くのか。貿易投資のアメリカファーストは変わらない可能性はある。国際機関や同盟国との付き合い方は変わるだろう。ドンロー主義は米国に得ではなく、続かない公算」「米国は変わる国だと頭に置かないといけない」

■ 6・24/出席：会28人、オ59人/「アメリカ建国250年」②/
司会：伊藤宏委員

ふじなみ たくみ
藤波 匠さん 日本総研主席研究員



「2015年にはじまった『地方創生』は移住促進策に偏重した。地方で質の高い雇用の創出ができなかった反省がある。移住促進政策にお金を投じて成果は大きくない」「結局は雇用の問題が重要。地方企業に対して大卒や高専卒など高度人材の採用を促していくことが大事だ」

■ 6・8/出席：会18人、オ46人/「人口減少時代を生きる」⑫/司会：小林伸年委員

なかたに かずひろ
中谷 和弘さん 東京大学名誉教授、東海大学特任教授



「現代国際法上、武力行使が容認されるのは、自衛権の行使に該当するか、国連安保理の武力行使容認決議に基づく場合。米・イスラエルによるイランへの武力行使はいずれも該当せず、違法と言わざるを得ない」「ホルムズ海峡を常時安定的に航行できるようにするため、協議の場の創設を提案する」

■ 6・25/出席：会22人、オ69人/「イスラエル・米の対イラン攻撃 背景と影響」⑫ホルムズ海峡と国際法/司会：出川展恒委員

映画「急に具合が悪くなる」に主演し、第79回カンヌ国際映画祭で女優賞に輝いた岡本多緒さん（写真中央）とヴィルジニー・エフィラさん（同左）らの記者会見が行われたのは、授賞式から2日たった5月26日昼。日本人で初めて女優賞に輝いた岡本さんはまだ興奮冷めやらぬ様子で、「まったく現実味が湧いておりません。とにかくたくさんの方の

カンヌ国際映画祭女優賞受賞
「急に具合が悪くなる」会見
「まったく現実味が」
5月26日

思う哲学者の宮野真生子さんと文化人類学者の磯野真穂さんによる同名の往復書簡集が原作。
フランスに住む末期がんの演出家の真理を演じた岡本さんは「以前から濱口監督の脚本の大ファンで、せりふがずば抜けてすばらしく、何度



に見てもらえるきっかけになればうれしい」と第一声を発した。
濱口竜介監督・脚本の映画は、がんを

読んでも面白い」と語り、「撮影中は本当に役者を見てくださった」と監督への感謝も述べた。
一方、介護施設の責任者で、パリで偶然に出会った真理と対話と交流を重ねながら理想の介護を追求するマリールールを演じたエフィラさんも、「濱口監督の映画のために日本に来ることができて、とても幸せ」と日本語で語ってから、9割方、フランスで撮影した日々を、こう印象深く振り返った。
「撮影中は、物語や人物の深いところにとどき入り、神秘的なものを探りにいく感覚でした。映画をつ

くる目的を超え、いろんな人が共に生きるための準備をしているような場でもありました」
同席した濱口監督（同右）は「宮野さん、磯野さんの魂を引き継ぐように演じてくださった二人の仕事を支えた自分がとても誇らしい」と喜んだ。その上で「何よりお二人は演技も人間性もすばらしく、それを記録した映像を見て、私は撮影現場でも編集する時でも、感動して、ちよつと泣いてしまった」と打ち明けた。
映画は6月19日に公開された。
読売新聞社編集委員 鶴飼 哲夫

*下記のゲストの会見リポートは4～8ページに掲載しています

カンヌ国際映画祭女優賞受賞 「急に具合が悪くなる」会見

おかもと た お
岡本 多緒さん カンヌ国際映画祭最優秀女優賞受賞

ヴィルジニー エフィラ
Virginie Efiraさん 同

はまぐち りゅうすけ
濱口 竜介さん 監督

まつ た ひろ こ
松田 広子さん プロデューサー

ダヴィド コキエ
David Gauquiéさん 同

■ 5・26／出席：会119人、才59人／司会：中村正子委員／
通訳：高野勢子さん

やま なか しん や
山中 伸弥さん 京都大学iPS細胞研究所名誉所長
京都大学iPS細胞研究財団理事長

■ 5・27／出席：会103人、才45人／総会記念講演会／司会：
老川祥一理事長

パトリック デニーン
Patrick J. Deneenさん 米ノートルダム大学教授

■ 6・4／出席：会38人、才52人／「トランプ2.0」⑦／司会：
半沢隆実委員／通訳：森岡幹代さん

シーハサック フアンゲートゲーオ
Sihesak Phuangketkeowさん タイ副首相兼外相

■ 6・10／出席：会12人、才23人／司会：江木慎吾専務理事・
事務局長／通訳：大野理恵さん

くほ ふみあき
久保 文明さん 前防衛大学校長

■ 6・15／出席：会26人、才49人／「アメリカ建国250年」①
／司会：伊藤宏委員

あきもと ち あき
秋元 千明さん 英国王立防衛安全保障研究所 (RUSI)
日本特別代表、特別名誉フェロー

■ 6・18／出席：会49人、才82人／「史上初のAI戦争～AIと
ロボットの戦場～」／司会：佐藤千矢子委員

デービッド マクギンティ
David J. McGuintyさん カナダ国防相

■ 6・25／出席：会17人、才50人／司会：有田司副理事長／
通訳：大野理恵さん

ラファエル マリアーノ グロッシ
Rafael Mariano Grossiさん 国際原子力機関 (IAEA)
事務局長

■ 6・26／出席：会75人、才63人／司会：半沢隆実委員／
通訳：長井鞠子さん、森岡幹予さん

総会記念講演会

山中 伸弥

京都大学iPS細胞研究所名誉所長
京都大学iPS細胞研究財団理事長

5月27日

「マラソンでいうと中間点」



山中さんが2006年にiPS細胞を初めて報告してから20年。研究は進み、iPS細胞由来の2つの再生医療製品が26年3月に期限・条件付きの製造販売の承認を得た。それでも達成感に浸ることなく「マラソンでいうと中間地点。ここからが本当の勝負」と話すのは、これまでも厳しい道のりだったからだろう。

iPS細胞の応用は創薬と再生医療が2本柱だ。創薬は遺伝性の病気を中心に臨床試験が進むものの実用化はまだない。一方、再生医療は15以上の臨床試験・臨床研究が進む。山中さんが特に力を入れてきたのは、高品質のiPS細胞をあらかじめ作って蓄えておき、再生医療用な

どに供給するストック事業だ。日本の応用研究の基盤となっている。品質の技術課題だけでなく、事業存続に欠かせない100人規模の雇用を守るのに苦労した。マラソン大会に出場して寄付を呼びかける姿は知れ渡り「この10年で日本の寄付文化はずいぶん変わった」と手応えを感じていく。

国際競争は激しく、米中が追い上げていくという。日本の強みとして研究対象の病気の多さを挙げ、それを支える京都大学iPS細胞研究所を中心とするオールジャパン体制の重要性を強調した。日本発の医療を普及させるには変わらぬ国の支援が必要になる。山中さんは「VW (vision and work hard)」というモットーのもと「寄付金や人材集めが自分の役目」とオールジャパンを支える決意だ。ゲストブックには「初志貫徹」と記した。

講演はいつもと同様にこれまで関わった人たちの功績をたたえ、感謝の言葉にあふれていた。寄付金をもとにiPS細胞研究財団を作り、ストック事業の雇用を守ることができたことを振り返り「ようやく長年の心配の一つがなくなった」と話すときの笑顔が印象的だった。

日本経済新聞社編集委員 松田 省吾

「トランプ2.0」⑦

パトリック・デニン

米ノートルダム大学教授

6月4日

「成功しすぎた自由主義」

米国の「ポスト・リベラル」思潮を先導する政治学者で、2019年にカトリックに改宗したJ・D・バンス副大統領の思想的支柱とも目されるノートルダム大学のパトリック・デニン教授が、国際交流基金の招きで初来日し、会見した。

日本でも話題を呼んだ「リベリズムはなぜ失敗したのか」で知られる氏は、現代アメリカ社会の分断の根本原因を、自由主義が失敗したからではなく「完全に成功したからこそ失敗した」のだと説く。



氏によれば、米国の左右両派は実は「あらゆる制約からの個人の解放」ということを推し進めた。左派は社会面、右派は経済面で自由を追求した結果、かつての中産階級と地域社会は破壊され、人々は

孤立した。見捨てられた人々の不満を嗅ぎ取り、既存のシステムを破壊する存在として期待されたのがトランプ大統領であり、トランプ現象は病理の「症状」だという。

一方で、視察した神奈川県真鶴町の小学校の給食風景を引き合いに、他者への義務や配慮といった伝統が息づく日本社会を高く評価。「私が生まれ育ったかつてのアメリカに似ている」と語った。質疑応答では、崩壊したコミュニティの再構築には、家族形成の支援の必要性を力説。また米国では非常にぜいたくなものになってしまったという、歩いて暮らせる街づくりなどでも、公共政策による積極的な介入が必要との考えを示した。

会見には、マイケル・イグナティエフ著『アイザイア・バーリン』の翻訳者である日経新聞OBの石塚雅彦氏も熱心に耳を傾けていた。リベリズムの巨人の伝記翻訳者が会場にいたことを後日伝え、「大変光栄だ。その方はいくつなのか」と身を乗り出して興味を示した。重い問いを突きつけ、知的な余韻の残る会見となった。

朝日新聞社オピニオン編集部

池田 伸壹



駐日大使の経験もあるシーハサック氏は穏やかな口調で話し始めた。現政権の安定的運営を背景に今後の経済成長に自信をのぞかせ、農業や観光での強みを矢継ぎ早にアピールしていた。

だが、シーハサック氏の発言で注目されたのはやはり2つの隣国に対する発言だろう。

軍事政権が形だけの「民政移管」をしたミャンマーについては、今の現実を各国が受け止めるよう促した。東南アジア諸国連合(ASEAN)は記者会見時点でミャンマー首脳や閣僚の主要会議出席を拒否しているが、シーハサック氏はミャンマ

シーハサック・フアン ゲートゲート

タイ副首相兼外相

6月10日

の孤立が地域の平和と安定を脅かすことになると指摘。国際社会の舞台に「完全復帰」できるよう支援していく姿勢を改めて強調した一方で、ミャンマー側に対しても暴力行為を減らすことや対話を重視するといった信頼回復への努力を求めた。

軍事衝突の後に停戦状態が続くカンボジアについては、停戦を持続的な和平につなげていくことが必要との認識を示した。同時に、国際的な場でカンボジアがタイについて「真実ではない話」をしているとの批判も展開した。共通の課題としてミャンマーやカンボジア国境にある特殊詐欺やサイバー犯罪の拠点への対処を挙げ、日本の協力にも期待を寄せた。

よどみなく話していたシーハサック氏が言葉を選びながら一段と慎重に述べたのは、日中関係の話題だった。台湾を巡る日中間の問題解決方法に関して問われた際には「互いに受け入れ可能な着地点を見いだしてほしい」とした。台湾を巡る二国間関係は、単に日本と中国だけの問題にとどまらない。シーハサック氏の言葉に全てが詰まっている。「厳しい時代だが関係の安定化を期待する。そのことがこの地域(ASEAN地域)の平和と安定につながる」

共同通信社外信部 市川 真也



「アメリカ建国250年」① 久保 文明

前防衛大学校長

6月15日

年大統領選では共和党の公認候補にとってトランプ氏の存在は重荷となる。ただ、民主党政権が復活したとしても、全てが元に戻るわけではなさそう。トランプ関税が生み出した既得権益や保守化した司法、ゲリマンダーと呼ばれる選挙区割り合戦などの激しい政党間対立は、トランプ氏が消えてもすぐにはなくならない。イデオロギー的分極化は今に始まったことではなく、1970～90年代にかけ徐々に現れてきた長期的なトレンドだからだ。

「トランプビズムはいつまで続くのか?」。二期目就任以降、関税から移民政策、ベネズエラやイランへの攻撃に至るまで、世界を振り回し続けるトランプ氏。こんなアメリカに私たちはいつまで付き合われるのか。今年「独立」から250年を迎えるアメリカは、自由・民主主義・平等といったアメリカ的理想に「目覚める時代」と「忘れる時代」を繰り返し、今はその谷間のサイクルにある、と久保氏は説く。第一次大戦以降、民主主義の普及を通じて「利他的な外交」をリードし、貧富の差や人種差別、ジェンダー格差の解消を進めてきたアメリカだが、その流れを全面的にひっくり返してきたのがトランプ氏だという。

そんなトランプ氏の支持率は政権発足以来の低迷にあえぎ、2028

ただ絶望する必要はなさそう。久保氏は、いまのアメリカとの向き合い方は「戦後最大とも言える難問」としつつ、「この国の振れ幅は大きく、トランプ以前のアメリカが戻ってくる可能性もそこそこある」と希望を託す。中国が軍事的・経済的威圧を強める中、日本一国で安全保障を確保するのはますます困難だ。同盟は一度解消したら復活は容易ではない。であれば、トランプのアメリカと離婚するのではなく、しばらく別居するつもりで残り2年半をやり過ぎつつ、並行して理念を共にする同志国との関係深化を探ることこそ日本の生きる道なのかもしれない。

日本テレビ放送網報道局長 小林 史

「史上初のAI戦争」

秋元 千明

英国王立防衛安全保障研究所(RUSI)
日本特別代表、特別名誉フェロー

6月18日

圧倒的戦力差生むAI兵器



ロシアによるウクライナ侵略戦争の技術的側面を、第一人者の秋元千明氏が映像・画像を豊富に使って解説した。ドローン(無人機)

が戦場の主役と化していることは人口に膾炙しているが、ウクライナ軍の戦いに人工知能(AI)が浸透している実態はあまり知られていない。

ウクライナ軍のFPV(一人称視点)ドローンがロシア兵を追跡して爆撃する映像はさながらテレビゲームのようだ。だが、起きていることはそれだけではないと秋元氏はいう。ウクライナ軍はいくつかの層から成るAIシステムを情報分析や敵識別、攻撃に使っており、それは米企業プラットフォームのAI指揮統制プラットフォームとも連携している。

ウクライナ軍の戦いを全体的に支えているのが「デルタ」と呼ばれる戦域情報分析システムだ。衛星やドローンの映像を統合し、広大な戦場を監視・分析している。攻撃の段でも、ドローン管理システムや無人機AIが実用化されている。意思決定の速度はけた違いに短縮され、領域横断の同時攻撃が可能になった。

ウクライナ軍は最近、ロシア軍の兵站ルート遮断やロシア領深部への攻撃で戦況を好転させているが、その背景にはAIと無人機システムがあるという。

秋元氏は米軍によるベネズエラやイランに対する作戦にAIが本格使用された実情も解説し、今日の戦争はAIの自律的行動や多次元統合戦を特徴とする「第6世代の戦争」だと定義。軍事用AI技術を持っているか否かで圧倒的な戦力差が出るため、20世紀の核兵器にも似て、「軍事用AIが21世紀の新しい抑止力になるのではないかと指摘した。

軍事用AIの問題点や危険性が指摘される昨今だが、原子力・核技術と同様に「功罪がある」と秋元氏は語った。国際的規制に関しては機が熟していないとの見解だった。

産経新聞社外信部長兼論説委員

遠藤 良介

デービッド・マクギンティ

カナダ国防相

6月25日

日英伊の戦闘機開発に関心

カナダのデービッド・マクギンティ国防相は防衛産業を含む180社近くのカナダの企業・団体から約300人の代表が参加する貿易ミッションに合わせて来日した。6月25日の記者会見では日本を「単なる貿易相手ではない。インド太平洋地域の安定に貢献するためのパートナーだ」と強調した。国際秩序が不安定化する中、海洋国家としての共通点や信頼関係を持つ両国が防衛・安全保障の協力を深めることで、地域の平和や安定に寄与すると力説した。

カナダは2月、同国初の防衛産業戦略を公表した。兵器調達で依存する米国の不確実性が増す中、兵器の国内調達率を上げ、自立性を高める狙いがある。



日本のような同志国とは防衛装備品の輸出入や技術連携を深める方針を掲げる。マクギンティ氏が訪日メンバーから聞いた声として紹介した「カナダは日本をもっと欲している」との言葉は、防衛分野での日本の関与に対する期待感の表れだ。両国が今後連携できる分野には、重要鉱物や人工知能(AI)、ドローン開発などを挙げた。

日英伊による次期戦闘機開発「GCAP(グローバル戦闘機航空プログラム)」に対する参加意欲も見せた。6月24日の小泉防衛相との会談で「カナダはこのプログラムをもっと知りたいとの意向を伝えた」と明かした。参加可否については日英伊の3カ国の意向に委ねると述べた。

イラン情勢については「危機の解決に希望を持っている」とし、機雷除去やサイバー技術の情報提供などで持続可能な停戦に貢献するとした。

対中関係でも日本政府の対応にヒントを与えた。6月24日に明らかとなった邦人拘束事案について、カナダ人男性が2018年に中国で拘束された経緯を振り返り、政府が規律と忍耐を保ちつつ、「会話や交渉を続けることが重要。他国の支援を求めることも必要だ」と呼びかけた。

読売新聞社国際部 大我 寛樹



ラファエル・マリアーノ・グロッシ

国際原子力機関（IAEA）事務局長

6月26日

廃炉作業「順調という印象」

国際原子力機関（IAEA）のグロッシ事務局長が6月23～26日に来日し、東京電力福島第1原発訪問後に会見した。グロッシ氏は廃炉作業について「順調という印象だ」と述べ、政府と東電が2051年までとする廃炉完了を前倒しできる可能性もあるとの見解を示した。

事故から15年が過ぎた福島第1原発では今年6月、炉心溶融を起こした2号機の原子炉建屋上部にある使用済み燃料プールから燃料の取り出しが始まった。28年度までに615体を共用プールに移し、安定的に保管する計画だ。グロッシ氏は「かなり迅速に作業が進んでいる」と評価。

23年8月に始まった処理水の海洋放出も「非常に成功している」と語った。

グロッシ氏

は、東電が燃料取り出しや処理水の放出で自信を深め、作業ペースが上がることで廃炉完了は「早まる可能性もある」と話した。

だが「廃炉の本丸」とされる溶融核燃料（デブリ）は1～3号機に推計880ト残り、取り出せたのは1ト未満。昨年、デブリの本格取り出しが従来の30年代初頭から37年度以降に遅れる工程が公表された。また1～3号機の原子炉格納容器直上にあるコンクリート製のふたには、デブリに匹敵する高濃度の放射性物質が付着し課題は山積だ。

やや楽観的ではないかと問われると、グロッシ氏は「（廃炉は）時間との競争ではない。重要なのは、作業を包括的で体系的な正しい方法で進めることだ」と強調した。

イランの核関連施設への査察については、イラン側と専門家レベルで初期段階の協議を始めたことを明らかにした。

グロッシ氏は、国連の次期事務総長に立候補している。「実際に機能する国連が必要だ。私はIAEAでの活動を通じて世界の指導者と関係を築いてきた。国際問題の解決に取り組む」と訴えた。

共同通信社科学部原子力報道室

広江 滋規

土曜記者ゼミ

1丁編②

記者のためのファクトチェック最新講座

6・6／講師…旗智広太 NHK報道局機動展開プロジェクト記者／出席…会場7人、ウェブ17人

情報源をしっかりと明かす

旗智さんはデジタル調査報道を担当し、フェイク対策に力を入れている。ファクトチェックの調査ではSNSで裏垢（裏アカウント）を作り、拡散源になりやすいインフルエンサーなどをフォローして「疑義言説」が流れるフィルターバブルを作り監視しているという。報道する際に「読者が再検証可能であること、情報源をしっかりと明かすことが大事だ」と語った。

調査報道②

福岡県「部課長会」給与天引きでパートイイ券購入

6・20／講師…御厨尚陽 西日本新聞社報道センター記者／出席…会場7人、ウェブ19人

粘り強く報じ続ける

西日本新聞社は3月、福岡県庁の課長級以上でつくる「部課長会」が給与から天引きした会費で県議会議員・副議長の政治資金パーティー券を購入していたことを特報した。取材のきっかけは、御厨さんが県政担

当時代の2020年、政治資金パ

ティーへ県職員が大量参加する異様な光景への違和感だった。後に県議会の重鎮による会合でも職員が大量に参加していることを知り、「大量動員させる何らかの縛りがある」と仮定して24年8月から取材を始めた。県幹部OBを中心に話を聞き、購入原資の会費が、会員の同意なく給料から天引きされている話を聞いた。取材チームを組み「あの手この手」で現職の職員の協力者探しに3カ月を費やした。県は6月に中間報告を発表したが、御厨さんは「（県政と県議会の）歪んだ関係性の話でまだまだ書き続けていかないとけないこともある。これからも粘り強く報じ続けていきたい」と語った。

サイバー記者ゼミ⑦

サイバーセキュリティの現場で起きていること

6・10／講師…川口洋（株）川口設計代表取締役／出席…会場48人、ウェブ48人

川口さんは大手セキュリティ会社を経て会社を設立し、多くの組織のサイバーセキュリティに関わってきた。組織内で事故調査報告書を読む勉強会を開催するなど、組織全体で事業を守る意識が重要だと語った。（すべて事務局）

京都府南丹市の男児殺害事件

富田 芳夫（京都新聞社報道部）

情報源の確認を徹底

事件確定まで検証見送る

まだ幼さが残る小学5年の男児が登校途中に行方不明となった。大規模な捜索にもかかわらず、目撃情報は得られない。捜索が実施済みの場所で見つかる遺留品……。京都府南丹市の静かな山里で起きた男児の行方不明には多くの「謎」があった。日を追うごとに報道陣は増え、捜索に進展がない日もテレビは連日現場からの中継を続け、警察OBらがワイドショーで独自の推論を重ねた。

保護者もSNS誤情報信じ

捜索、複数の遺留品の発見、遺体の発見、そして容疑者の逮捕……。約3週間にわたってリアルタイムで進んだ事件は、SNS上でも大きな話題を呼んだ。ネット空間には真偽不明の情報やデマが飛び交い、謎解きと犯人捜しが過熱。「一億総探偵」と称される状況で、逮捕前から父親を犯人視する投稿や親族らの中傷する書き込みも多く含まれていた。誤情報の拡散力は強い。「父親は

24歳の外国人ですよ。もう逮捕間近と聞きました」。男児と同級生の子を持つ保護者でさえも、SNSで流布した誤情報を信じていた。一次情報に最も近い現地取材であっても住民の証言が正しいのか、情報の見極めと情報源の確認を徹底しながら取材を進めた。

SNSでの悪質な誤情報に対するファクトチェックの必要性は、取材班の中で議論になった。人権を侵害するデマや中傷を検証し、否定することは報道機関としての責務だ。例えば、男児が父親から虐待を受けているという文章とともに投稿された無関係の子どもが大人から殴られる映像について検証を行うことも考えた。

しかし、私たちが当該の映像と男児の関係を否定することはSNS上に一つの「答え」を提示することになりかねず、親族を犯人視する風潮を強める恐れがあった。もともと遺体が見つかるまでは報道機関として

「事件」と断定することはできず、この段階での検証は見送った。そのためニュースや連載で一連のデマを否定できたのは、父親の逮捕後からだった。

現場にはユーチューバーも

選挙や政治報道ではスタンダードとなりつつあるファクトチェックという検証手法を事件報道にどう取り入れるのか。今回のように「事件」と断定できるまでに時間を要するケースの場合、どのタイミングでどう報じるかは議論の余地も多いと感じた。そのためには捜査機関への取材を深めることは不可欠で、推定無罪を徹底しながら適切な形で検証を



記者やカメラが並ぶ中、送検のため捜査本部がある南丹署を出る容疑者を乗せた車両（4月16日午後/南丹市園部町/京都新聞社提供）

模索することが求められるだろう。

メディアスクラム（集团的過熱取材）への対応も課題だと感じた。男児の自宅付近には連日多くのメディアが押し寄せたが、そこにはユーチューバーらの姿もあった。自宅前には親族が敷地内への立ち入り禁止や取材には応じない旨の張り紙を出していたが、無断で敷地内に入って撮影を試みる投稿者もいた。現場にいた報道各社は京都アニメーション放火殺人事件などの経験を踏まえ、親族の負担にならないよう代表取材の打診を検討することもあったが、そうした申し合わせは当然、既存メディアに限られる。誰もが情報を発信できる時代。節度ある取材をメディアが保てたとしても、被害者らの平穏は守られるのだろうか。

再婚して間もない父親が養子を殺めた今回の事件。被害者家族は、同時に加害者家族になった。それだけでなく、SNSを中心に言われなきバッシングを多く浴びた。真相解明の場は司法に移る。家族の中で何があったのか。地元紙として取材を続けていきたい。

とみた・よしお▼2011年入社 京田辺・学研総局 報道部 滋賀本社を経て24年から京都府警担当 25年から府警キャップ

辺野古「教育基本法」違反

国分 伸矢（共同通信社社会部）

文科省の判断 検証必要

「安全」から「学習」へシフト

4月24日夕、京都市上京区の同志社大キャンパスの前には記者やテレビカメラのクルーら数十人が集まっていた。待っていたのは文部科学省職員の一団。この日、沖縄県名護市辺野古沖で研修旅行中の同志社国際高の生徒らが乗った船が転覆し、高校生と船長が死亡した事故を巡り、文科省が学校法人同志社への「現地



学校法人同志社の現地調査に入る文科省の関係者ら（4月24日/京都市上京区/共同通信社提供）

調査」に入った。調査といっても中は関係者への聞き取りで、強制力を伴うものではない。しかし、硬い表情の職員が1列に並び建物に入る様子は捜査機関を思わせるほどのものしかた。

約1カ月後の5月22日、文科省は同志社国際高の平和学習が政治的活動を禁じる教育基本法に違反するとの見解を公表した。生徒らが乗る船が米軍普天間飛行場の移設工事に反対する抗議船だと認識しながら研修を行ったことや、別の立場を学習する機会がなく偏った内容だったことが主な理由だ。学校現場で政治的中立性が問題となったことは過去にもあったものの、違反認定にまで踏み込むのは1947年の法制定以来初めてだった。

学校活動の一環で生徒らが亡くなった結果の重大さを踏まえれば、船の運航管理者とともに学校の安全管理が厳しく問われるのは当然だ。当初、学校を所管する京都府を通じて

情報収集していた文科省が直接調査に乗り出した必要性も理解できる。ただ、違和感はあった。今回の検証の中心だったはずの安全管理体制の問題から、徐々に平和学習の在り方にシフトしているように感じられたからだ。実際、現地調査の1週間前には自民党が政府への提言で「平和教育の名の下に、特定の見方に偏った教育が行われることはあってはならない」と言及。党の会合の中でも同様の指摘が相次いでいた。

「委縮効果は全くない」

文科省の判断に何らかの政治的な意図は入らなかったのか。見解発表後、文科省幹部はそろって圧力や忖度を否定し、代わりに学校側の要因を口にした。安全管理や平和学習の内容だけでなく、調査などへの対応にも問題があったと、ある幹部は説明した。今回は特異なケースで、他の学校に影響するものではないとする幹部もいた。文科省の方針が政権の中核に伝えられたのは公表の少し前だったという。国が特定の学校の教育内容に踏み込む異例の対応だったが、公表に向けてそのまま進んだ。自民党の提言、学校法人への現地調査と、違反認定に向けた下地は整えられていった。

教育現場に与える影響は大きい。

松本洋平文科相は公表後の記者会見で「萎縮効果を生むことは全くない」と述べたが、沖縄では、平和学習の内容を巡り、基地問題を含めず沖縄戦に特化するよう学校から要望が寄せられたケースもあったという。

文科省が公表した見解は資料部分を除けば10頁。判断に至る詳しい説明はなく、「総合的に勘案」という不透明な言葉に集約された。過去の事例に照らして文科省内でどんな議論があったか、今後検証を続ける必要がある。

安全管理体制は再点検を

今回の見解では、事前の下見が行われていないなど学校側の安全管理体制の不備も多岐にわたり指摘され、亡くなった生徒の遺族は投稿サイト「note」に「安全管理体制を再点検することは子どもたちを守ることにつながる。全ての学校で見直す機会となつてほしい」とつぶつた。子どもたちの命を守るために何が必要か。平和学習の在り方を考えるとともに、そこが問われていることも強く意識しなければならない。

こくぶん・しんや▼2003年入社
戸支局 札幌支社編集部を経て社会
部 25年から文部科学省担当

今村聖奈騎手 JRA女性初のGI制覇 寺下 厚司(スポーツニッポン新聞社大阪本社レース部)

「かつこよい」騎乗で快挙 女性騎手の未来照らす一勝

「かつこよく乗りたい」。18歳のデビュー時から今村聖奈は騎手の目標として掲げていた。その騎乗を最高の舞台で発揮することになる。5月24日に東京競馬場で行われたGIレース「第87回オークス」は、今村騎乗のジュウリョクピエロが差し切つて優勝。JRA(日本中央競馬会)所属女性騎手として初のGIジョッキ―となった。

初めてのクラシック競走でも焦りはなかった。「彼女のことは一番分かってる」。パートナーの能力を信じていた。道中は後方でじっくり待機し、最後の直線に入っても手綱は抑えたまま。残り400メートルでようやくゴールサインを出すと、馬群を縫ってライバルを次々とかわしていく。ゴール前、粘り込むルメール、外から迫ったレーンの名手2人を抑え、鮮やかに抜け出した。右手で力強くガッツポーズ。「私は乗っていただけ。最後は間隔が狭かったけど、馬が導いてくれた」。「かつこよすぎ

る」騎乗に、東京競馬場に詰めかけたファンから歓声が上がった。

レース後、JRAから公開されたレース中に着用するジョッキ―カメラの映像は410万再生を超える歴代1位の回数を記録(6月23日時点)し、競馬ファンのみならず社会的な話題となった。勝利した直後に「やばい、勝つてもうたー」やったー」やったー、アンタいっちゃんかっこのいいわあ」と馬上でパートナーに話しかける今村の歓喜が収められている。

とにかく負けず嫌い。元騎手だった父・康成さん(現在は飯田厩舎の調教助手)の影響を受け、ジョッキ―になることを志した今村。デビュー時から注目され、ルーキーイヤーから女性騎手としての記録更新を騒がれたが、性別に関係なく一人の騎手として扱われることを望んでいた。デビューから4カ月後の2022年7月、重賞初騎乗だったGⅢレース「CBC賞」をテイエムスパ

ダとのコンビで逃げ切りV。話題だけでなく、騎乗ぶりでも存在感を放ち、1年目は女性騎手最多となる51勝を挙げた。

苦難続き 弱さと向き合う

ただ、翌年からは苦難の連続。2年目は25勝と勝ち星が半減。3年目の夏には調教中に右肩を脱臼して3カ月間の戦線離脱、わずか6勝に終わり「自分がなりたかったジョッキ―像はこれだったのかな」と悩む日々が続いた。その間には小学生からの幼なじみで同期の角田大河さんが天国に旅立つ悲しい出来事もあった。昨夏には普段調教をつける滋賀県・栗東トレーニングセンターを離



オークスを制したジュウリョクピエロ(右)。鞍上の今村聖奈はこん身のガッツポーズ(5月24日/東京競馬場/スポーツニッポン新聞社提供)

れ、茨城県・美浦トレーニングセンターに滞在。環境を変えることで、自分を一から見つめ直した。どんなにつらい状況でも自分の弱さと向き合いながら大好きな馬の上で、大好きな騎手の仕事を続けてきた。そして、ジュウリョクピエロと出合い、歴史的快挙につながった。

現役JRA女性騎手は6人

JRA所属の女性騎手が初めて誕生したのは1996年。16年には16年ぶりの女性騎手としてデビューした藤田菜七子が話題を集め、19年のフェブラリースではJRA所属女性騎手として初のGI騎乗(コパノキッキング5着、同年カペラスでJRA重賞初制覇を飾り、男性相手でも通用することを証明した。現役のJRA女性騎手は21年デビューの永島まなみと古川奈穂、22年の今村聖奈、23年の河原田菜々和小林美駒、25年の谷原柚希の6人。男性騎手の126人に比べれば圧倒的に少ないが、今村の快挙に影響を受け、騎手を目指す女性が増えるだろう。女性ジョッキ―の未来を明るく照らす大きな一勝になったことは間違いない。

てらした・あつし▼2009年入社 東京本社レース部で中央競馬担当 13年から大阪本社レース部で競馬取材

サッカー界の哲人が語った 人権と差別と「移民の現実」



たかだ まさゆき
高田 昌幸

1960年生まれ ジャーナリスト
2026年度から専修大学文学部
ジャーナリズム学科特任教授
および東京都市大学名誉教授
北海道新聞記者 高知新聞記
者 東京都市大学メディア情
報学部教授 放送倫理・番組
向上機構(BPO)放送倫理検
証委員会・委員長代行などを
務める 04年に北海道警察裏
金問題追及の取材班代表とし
て新聞協会賞 菊池寛賞など
受賞 著書に『調査報道の戦
後史 1945—2025』『真実 新
聞が警察に跪いた日』ほか 共
著に『権力VS調査報道』『権
力に迫る「調査報道」』『メデ
ィアの罫 権力に負担する新聞・
テレビの深層』ほか

北米を舞台に繰り広げられている
サッカーのワールドカップ(W杯)
は、この会報が出るころ、大詰めを
迎えている。本稿執筆時はまだ予選
リーグ。日本は2試合目でチユニジ
アを下し、勝ち点4を挙げた。最終
成績は果たしてどうなるか。盛夏の
楽しみがまた一つ増えた。

◆テーマは移民「すぐに来て」

サッカーに関心のない人にはどう
でもいい話かもしれないが、かつて
フランス代表にリリアン・テュラム
選手という名ディフェンスがいた。
FCバルセロナなどで活躍。代表チ
ームではジダンらとともに一時代を
築き、1998年のW杯フランス大
会では同国の優勝に貢献した。

現役だったテュラム選手にインタ
ビューしたのは、2007年1月で
ある。シーズン中であり、「取材は

半年か1年待ち」と言われていた
が、サッカーの取材ではなくテーマ
は移民だと伝えると、「すぐバルセ
ロナへ来て」と話が進んだ。

当時35歳だった彼はカリブ海に浮
かぶ仏領グアドループ諸島の出身
で、幼い頃、パリ郊外に移り住んだ。
社会問題にも積極発言することで知
られ、「サッカー界の哲人」の異名
があった。

今から20年も前の取材だが、学生
たちから「ロンドン駐在時に最も印
象に残った取材は何ですか」と問わ
れると、しばしばテュラム選手への
インタビューを挙げる。

FCバルセロナの本拠地カンブ・
ノウでの取材は3時間近くに及んだ。
サッカーの話はほぼゼロ。移民や社
会問題、現代史へとテーマは広がり、
「哲人」の熱弁は止まらない。例え
ば、彼はこんなことを話すのである。

◆1948年、二つの出来事

「僕たち黒人以外にはなかなか理
解してもらえないことって、たぶん
山のようにある。黒人はしつかり記
憶しようと思っけていても、それ以外
の人々は注意を払っていない」

「例えば、1948年に制定され
た世界人権宣言。日本でもきつと教
科書にも載っていると思う。すべて
の人は人種、皮膚の色、性、言語、
宗教、政治上その他の意見などによ
って差別されてはならない。そうい
うことが書かれている。その意味と
大切さを否定するわけではないけれ
ど、その同じ年、世界では何があっ
たかを知っているだろうか？ アフ
リカでは何があったか即答できるだ
ろうか？」

正直に言う、私はとっさに答え
られなかった。

「あの悪名高い、南アフリカ共和
国のアパルトヘイトはそれまで法
的根拠のない慣習だったのに、世界
人権宣言が生まれた1948年に白
人の権利として初めて法制化され
た。同じ年に起きた二つの出来事。
その意味、その落差を日本の学校で
は教わるのだろうか？」

当時のメモによると、取材は1時
間の約束だった。それでもテュラム
選手の話は止まらない。横に座るマ
ネジャーに「後の予定はキャンセル
して」と言い、話は続いた。

「フランス革命のときの人権宣言
も世界では広く知られている。日本
の学校でも習うと思う」

日本では中学校の教科書に載って
いる、1789年という年は暗記さ
せられた記憶がある、自由・平等・
人権・友愛、そして民主制といった
言葉と共に。



リリアン・テュラムさん(左)とインテル・ミラノでサッカー選手として活躍する息子のマルクス・テュラムさん(右)(イタリア・ミラノ サンシーロ・スタジアム/ 5月17日/AFP時事)

そんなふうに答えていると、テュラム選手は続けた。

「確かに、フランス革命は世界的な大事件だった。でも、自由と平等を旗印に市民革命が起きた当時、僕たちの先祖である黒人たちは奴隷として売り飛ばされていて、しかも当時、奴隷貿易はピークだった」

「奴隷が集められ、船に乗せられたアフリカの場所に行ったことがあるけれど、フランス革命の起きたパリは知っていても、あの奴隷貿易の基地の場所を知っている人は、日本にも欧米にもほとんどいないんじゃないか。そして思うんだけど、同じような例はほかにもいっぱいあるんじゃないか」

「例えば、1931年にパリで開かれた世界植民地博覧会もそう。そこでは黒人が展示品だった。いいかい？ 生きた黒人が展示されたんだ。たった70年くらい前の話だ。それなのに、多くの人はその事実を忘れてる。あるいは、そもそも知らない。このことが示している重大な意味を社会は理解しているだろうか」

◆「白人に生まれていれば」

テュラム選手が故郷のグアドループ諸島を離れ、フランス本土に移住したのは、9歳の時だ。

「故郷の島では、母親たちの世代はずっと、白人と結婚することが夢だった。白人と結婚すれば、それだけ子どもの肌の色が白くなる。僕の子どももあるとき、『白人に生まれていれば良かった』と言ったことがある。一度だけね。そのとき、僕は妻と一緒に息子と向き合って、じっくり、本当にじっくり話した。『どうしてそう思うのかい？』って。頭越しに怒ったりはしなかった」

「知っての通り、僕が母親ときょうだいたちとパリ郊外に移住してきたころは、本当に貧しかった。部屋は狭く、机もない。団地の階段を机代わりにしていた。パリの郊外って言えば、こういう場所か分かんと思

う。幸いにも、僕はサッカーがうまくて、プロになって、収入がたくさんあって、いい暮らしができるようになった。でも、息子はこの先、どうなるんだろうと思うことがある。そして、ほかの子どもたちはどうだろうって」

W杯フランス大会で初優勝を果たしたとき、仏代表チームは豪華な布陣だった。中盤はジダンをはじめ、デシャン、プティ、ジョルカエフらの各選手で構成。守備はデサイーが統率し、前線にはアンリやトレゼゲラの点取り屋がいた。

パス回しは華麗で、スピード感も十分。一方で移民やその子孫も多いことから「ボールは十数秒で世界を1周する」とも評された。深刻な移民問題を抱えていたフランスは代表チームの進撃に沸き、民族の融和も進むという見方すら出たという。

「でも、サッカーはサッカーだ」

テュラム選手はそう言った。

「W杯の試合に勝ったくらいで、移民社会の現実が変わるわけがない。もっと本質的な問題がある。試合の結果に沸き立つだけでなく、それを僕たちはもっと知るべきだと思う」

◆世を変える知識伝える職業

そして、このあと、彼の口からあ

の言葉が飛び出したのだ。

「世の中を変えるための知識。それを伝えることができるのは、あなたのような職業、ジャーナリストだと思う。それと教育に携わる人たち。この二つの職業の重要性はもっと強調されていい」

このインタビュから4カ月後の2007年5月、フランスでは大統領選があった。その際、テュラム選手は当時内相だったサルコジ候補を人種差別的であると厳しく批判し、大きな議論を呼んだ。これに象徴されるように、テュラム選手は現役時代も引退後も社会への積極的な発言を続けた。

そして、彼の子どももまた、サッカー選手としての技量を父から引き継いだ。幼い頃、父母に「僕、白人に生まれたかった」と口にした、あの男の子である。

そのマルクス・テュラムはイタリアのインテル・ミラノで活躍しており、今年のW杯では仏代表に選ばれた。

代表での背番号は9。ポジションは父と違ってフォワードだが、人種差別に反対したり自国の極右政党の躍進に懸念を示したりと、社会に向けて積極的に意見を表明する姿も父親そっくりだ。



山野千枝さん(左から2人目)(2025年7月/本人提供)

私が会った
あの人の

山野千枝さん ベンチャー型事業承継代表理事 「アトツギ」意識改革呼ぶ

高橋 寛次(産経新聞社)

長い間記者として働くと、若い頃に会った人が後に大活躍するとうれしい知らせを聞くことがある。私にとって一般社団法人「ベンチャー型事業承継」代表理事の山野千枝さんはそうした知り合いだ。山野さんは中小企業の後継者を「アトツギ」と片仮名で呼ぶことで新しい意味を与え、意識

改革を促した。その取り組みが国を動かし、ビジネスアイデアを競う「アトツギ甲子園」(中小企業庁主催)の開催につながった。

私は2003年に異動した大阪経済部が初めての本社出稿部で、担当は中小・中堅企業だった。縁もゆかりもない関西で戸惑いながら取材する日々。取材対象となる企業を紹介してくれる大阪市のベンチャー支援施設「大阪産業創造館(産創館)」はありがたい存在で、この施設の広報担当者が山野さんだった。

■国も動いて「甲子園」開催

私も当時、山野さんの依頼で初めて、シンポジウムに登壇する機会も得た。明るくて、会う人を前向きにするような力を感じたが、それが国も巻き込んだ「うねり」をつくっていくということまでは予測できなかった。同時期に取材していた中小企業家同友会の担当者から、中小の最大の課題は、後継者不足だと聞いてい

たが、山野さんがその後取り組んだのはまさに、後継者不足解消の手段の一つとして有意義なものだった。

きっかけは、産創館のフリーペーパー「ビーブラッツ」の編集に携わり、さまざまな企業を取材し、同族経営企業の意外な一面を発見したことがきっかけだったという。一般的には伝統を重視し、変化に乏しいとされるが、企業によっては目覚ましいイノベーション(技術革新)を起こして進化を遂げていたのだ。

そして、大学の非常勤講師として、主に中小企業後継者を対象としたゼミを開設。集まった20人以上の学生に「後継ぎ」のイメージを聞いたところ、「親との確執」「借金」「義務感」「古い組織」などのネガティブな言葉。家業を継ぐことへの抵抗感を強く感じたという。そこで、家業を継いで自らの創意工夫で事業を拡大した経営者を講義に呼んで直接、語り掛けてもらったところ、彼らの考えが前向きに変わっていくのを実感した。このゼミを通し、後継ぎの意識変革を促す取り組みについて「本当に価値があると確信した」と振り返る。

政策提言やイベントの提案などの活動を経て、国も動いた。21年、初め

てのアトツギ甲子園が開催される。

私はさまざまなメディアやSNSでの本人の発信で、山野さんの活躍を見聞してきた。千葉総局のデスクだった23年には、千葉県のアトツギ甲子園への出場者を取材。経済部次長として東京に戻った24年には都内で再会し、アトツギ支援に携わるまでを語ってもらい、記事にした。

■MANGAのように世界へ

今年2月には初めて、都内で開催された第6回アトツギ甲子園を取材。全身全霊でプレゼンに挑むアトツギたちの姿を見て、一人の女性の情熱と行動力がもたらしたものの大きさに改めて、心を動かされた。山野さんは、「ATOTTSUGIをKAIZENやMANGAのような世界標準ワードにしたい」と、海外展開を視野に入れている。今後も、その取り組みの行く末を見守りたいと思う。

(たかはし・かんじ 1997年7月入社 経済部長)

次号は高橋さんと内閣府の記者クラブ(経済研究会)でかつて、共に取材した加藤修平さん(日本経済新聞社)にバトンが渡ります。

マイBOOK マイPR

『広島を伝える——メディア人として思うこと』

飯田 政之（読売新聞社出身、広島テレビ会長）

よそ者の視点で読む被爆地

元新聞記者が地方テレビの経営者に転じて広島をどう見たか——鹿児島市出身。読売新聞東京本社で政治・文化を担当した経験背景に、「よそ者の視点」から広島を論じる。被爆地のメディアの責任を起点に、音楽ホール問題やカープ、武家茶道、熊野筆、地酒などの題材を通して都市の魅力を描き、SNS時代の地方テレビの使命にも言及した。巻末にネット視聴可能な番組一覧を収録。読むことと視聴を往還しながら広島に迫る。



南々社 1,650円

『巨大地震の真実 地震研究の現在地から考えること』

倉澤 治雄（科学ジャーナリスト、日本テレビ放送網出身）
笠原順三（東京大学名誉教授との共著）

巨大地震に立ち向かう

東日本大震災から15年、巨大地震に対する備えが緩んできた気がします。本書は海洋地震の世界的権威である笠原順三（東京大学名誉教授）から

地震研究の最新情報を引き出す形で書きました。

南海トラフだけではありません。千島海溝、日本海溝、それに都市直下地震も懸念されます。日本列島は4つのプレートが重なる地球上の特異点です。「地震予知は不可能」とあきらめるのではなく、日本の科学技術力を結集して巨大地震に立ち向かうことこそが次世代、次次世代への義務だと思えます。



花伝社 1,980円

『国家消滅の52日 サイゴン陥落 アメリカに依存した国の悲惨！』
古森 義久（産経新聞社ワシントン駐在員特派員）

現代日本にも類似する教訓

ベトナム戦争の最終段階、南ベトナムという国家が北ベトナムの軍事大攻勢でわずか52日間であっけなく消滅したかを現地目撃した記者が報告する。アメリカ軍撤退後の2年間に南北の両国家が衝突し、北が中国やソ連の豊富な軍事支援を得たのに南はアメリカに見放され滅びていった経過を個々の人間にも光を当てて再現する。

南ベトナムは自国の安全保障をアメリカ



ビジネス社 2,200円

かにゆだねてきた点で現代の日本にも類似する点からの警告や教訓も明示される。

この欄では、会員の皆さんが出版された著書をご紹介します。2000字程度で本の内容や狙いをおまとめください。ご希望の方は事務局の西村までお問い合わせください。
電話・03-3503-2729
メール・nishimura@jinpec.or.jp

■会議報告

●第573回企画委員会

（6・9 9階会場＆オンライン）
菅野幹雄企画委員長（日本経済新聞社）の退任に伴い、後任の藤井彰夫委員長（日本経済新聞社）が冒頭あいさつし、議事を進行した。退任する大内佐紀委員（読売新聞社）があいさつした後、今後のゲスト候補について意見交換した。

出席 藤井委員長、青池、行方、佐藤、橋本、大内、高橋、辻本、森田、小林、中村、白石、早川、田中、山口、宮内、今井、出川、山下、岩田、萩原、藤川、立石、鈴木、滝の各委員。

●第586回会員資格委員会

（6・10 小会議室）
新任の松尾真一委員（日本民間放送

送連盟事務局次長兼編集広報部長兼研究所長）があいさつした後、7月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 福島委員長、蔭西、鈴木、松尾の各委員。

*会報委員会は6月3日に開催予定だったが、台風6号接近の影響により休会し、7月号の編集についてメールによる意見交換と集約に切り替えた。

●第744回理事会（書面）

①2025年4月からの公益法人法改正により、事業報告で「法人の運営体制の充実を図るための取組」を記載することが義務付けられた。それに伴い、25年度の事業報告に同項目を追記した件、②左記の役員一部交代に関する件、③会員の入退会（7月1日付）を承認した。

〈理事交代〉

・日本経済新聞社
藤井彰夫論説主幹（旧菅野幹雄氏）
・フジテレビジョン
川野友裕報道局長（旧塚越裕爾氏）
・テレビ東京
大久保直和常務取締役報道、IP事業担当補佐（旧八田亮一氏）

・九州朝日放送
中島大介東京支社長（旧大保一氏）

新しい個人D会員

■ ■ ■ おおいし いたる 大石 格



1985年日本経済新聞社入社。政治部次長、那覇支局長、ワシントン支局長、上級論説委員、編集委員などを経て、3月退社。

引き続き政治Watchingをしていくつもりです。よろしくお祈いします。選挙の票読みが好きなので、日本選挙学会にも入りました。

■ ■ ■ きだ たかし 喜田 尚



1985年朝日新聞社入社。社会部、国際編集部次長、外報部次長、ローマ、ウィーン、モスクワの各支局長などを経て、5月退社。

朝日新聞で国際報道畑を歩み、戦取材に追われました。そこで痛感したのが自由な言論の大切さ。今後も微力を尽くしたいと思います。

■ ■ ■ さく ま けんいち 佐久間 憲一



1982年新潮社入社。出版部、文庫編集部次長、新潮OH！文庫編集長、その後、バジリコ常務取締役やポプラ社ポプラビーチ編集室長などを経て、現在、牧野出版代表取締役。

生涯現役を唱え、出版人としての活動も45年目となった。ネット発信主体の時代だからこそ、書籍で伝えるジャーナリズムの重要性を訴えたいと思います。

■ ■ ■ つる た とよひこ 鶴田 東洋彦



日刊工業新聞社を経て1997年産経新聞社入社。東京本社経済部長、大阪本社編集局次長、取締役西部代表、常務取締役、日本工業新聞社代表取締役社長などを歴任し2024年6月退社。現在、東京女子医科大学広報アドバイザー。

経済分野を長く担当してきました。きな臭い出来事あまりに多いのが心配で、改めて内幸町の空気を吸いたくなりました。よろしくお祈いします。

■ ■ ■ はり ま たくし 播摩 卓士



1984年東京放送(現TBSテレビ)入社。経済部長、ワシントン支局長、編集主幹、解説室長、ニュース23やBS-TBS「Bizスクエア」などのキャスターを経て退社。現在、帝京大学教授。

プラザ合意とバブルの時代に駆け出し。その後は、デフレと低成長に苦しむ時代を追いかけた記者生活でした。やっと訪れた転換期、見逃すわけにはいきません。

■ ■ ■ やまぐち しょうこ 山口 昌子



1966年産経新聞社入社。71年創刊の夕刊フジに異動。86年産経新聞社外信部。90年から退社の2011年までパリ支局長。25年までパリでフリーの記者および作家活動。

35年余のパリ生活を終えて25年末帰国。パリから日本および世界を見てきたが、東京から世界を眺め続けたいのでよろしくお祈いします。



生成AIに書けないものってなんだろ

う。大学で学生が提出したりレポートを読むたびに、そう考える

ことが増えた。

調べもの、文章の下書き、要約、翻訳、悩み相談。使い方の濃淡はあるにせよ、生成AIは若い世代の間に急速に広がっている。

少し前までは、生成AIを使って書いたりレポートは比較的分けやすかった。内容に明らかな誤りがあったり、授業で扱っていない高度な概念が突然出てきたりしたからだ。しかし、AIの急速な進歩に伴い、最近ではAI作かどうかの判別が難しくなった。

それでも、痕跡がまったく消えるわけではない。同じ課題に対し、論点も結論もよく似たレポートが並ぶことがたびたびある。

一見するとよくまとまっている。だが、授業中どこに興味を感じたのか、何に疑問を持ったのか、どんな経験と結びつけて考えたのか

AIに書けないもの

か、ほとんど伝わってこない。AIの便利さはよく分かる。怒らない。待つてくれる。何度でも聞ける。他人には言いにくいことも、AIには相談しやすい。

一方で学生たちは、AI使用の危うさにも気づいている。AIに頼り過ぎれば、自分で考える力が弱くなるのではないか。AIに仕事を奪われるのではないか。そうした不安は、自分の将来像そのもののへの不安でもある。

それでも、希望はある。AIに書けないものがあるとすれば――授業中に胸に残った一言、自分の経験と結びついた問い、書きながら考えが変わっていく過程。そうしたものは、AIが代わりに表現することはできない。

学生たちには、AIに書けない「何か」を見つけてほしい。そして、その「何か」を引き出す問いを、私たち教える側は用意できているのか。問われているのは、学生だけではない。

フジテレビジョン出身

鳴下 ひろみ

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 文月お献立 (7/31まで)

前菜：穴子八幡巻き、つぶ貝酢みそあえ、ふくさ玉子、茄子煮おろしなど 椀：ハモくずたたき ジュンサイ、小メロン 造り：鮪、鯛皮霜焼き物：白尼鯛 黄身醬油焼きなど 煮物：楓冬瓜鶏みそ掛け、里いもなど 食事：そうめん 甘味：マンゴームース、キウイ (5,500円) (板長：内海圭史)
*仕入れの都合で内容が変わることがあります。

洋食 季節のおすすめコース (8/1まで)

生ハムといちじくのサラダ、枝豆の冷製クリームスープ、牛フィレ肉のグリル マディラ酒のソース、桃のコンポートとピスタチオのアイス、コーヒーまたは紅茶、パンとバター (4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。
(シェフ：佐藤和治)

アラスカ「夏の会員サービス」8月3日～28日

恒例のレストラン・アラスカの夏の会員サービスは、シェフ自慢の「夏の特別メニュー」をご用意します。通常なら1万円相当のフルコースを5,500円(税込み)でご提供します。

メニュー オードブル盛り合わせ、冷製ミネストローネ、真鯛のポワレ アンチョビとナッツのノワゼットソース、和牛ランプステーキ 和風オニオンソース、デザート盛り合わせ、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス

※メニューは一部変更の場合があります。

ご予約はご利用希望日の1カ月前から承ります。電話03-3503-2731までお願いします。このメニューは眺めの良い窓際のお席をお使いいただけますので、ご希望の方はご予約の際にスタッフにお申し出ください。

10階レストランが貸し切りの場合は、9階和食レストランでもお召し上がりいただけます。

8月27日、28日に記者研修会

毎年恒例で夏に現役記者を対象に記者研修会を開催しています。すぐに活用できる実践的な講座が毎回好評です。今年は8月27日(木)、28日(金)に対面とオンライン併用で開催する準備を進めています。詳細が決まりましたら、法人会員各社へご案内いたします。

傘、お忘れではないですか

梅雨の季節、クラブの傘立てに放置されている傘があります。お心当たりのある方はお早めにお持ち帰りください。

クラブの電話 ダイヤルイン

●和食レストラン(9階) ☎3503-2723 ●会員事務 ☎3503-2727
●洋食レストラン(10階) ☎3503-2766 ●経 理 ☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
●受 付 ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：119社 ●基本会員：686人 ●個人会員：961人
●法人・個人賛助会員：55社・117人 ●特別賛助会員：95人
●名誉・功労会員：13人 ●学生会員：102人 計174社・1,974人

<法人代表変更>

- ・下野新聞社 亀井正明 代表取締役社長 (旧 若菜英晴氏)
- ・BSテレビ東京 長田隆 代表取締役社長 (旧 加増良弘氏)
- ・朝日放送テレビ 平栗大地 取締役 (旧 岩田潤氏)
- ・中国放送 真田和幸 報道制作局長 (旧 伊藤誠治氏)
- ・RKB毎日放送 野中滋朗 東京支社長 (旧 竹島史浩氏)

山形新聞さんからさくらんぼ



今年も山形新聞社からさくらんぼをいただきました。橋拓・東京支社長と坂本由美子・東京支社編集部長が大粒の紅秀峰を届けてくれました。ラウンジや和食レストランで会員の皆さんに召し上がっていただき、「甘くて美味しい」と大好評でした。

会員社所属の皆さんも施設利用できます

会員社所属の方であれば、会員でなくてもクラブのレストランやラウンジを利用することができます。ラウンジにはライティングデスクがございますのでPCを使つての作業もできます。各省庁の記者クラブの皆さんもぜひ、お立ち寄りください。ご利用の際は社員証をご提示ください。

お盆期間の営業時間 ウェブで確認を

例年、お盆期間はクラブ施設と事務局の開室時間を短縮しています。この期間の開室時間が決まりましたら、ウェブサイトに掲載しますので、ご確認ください。

HP情報 <https://www.jnpc.or.jp/>

●元衆院議長・河野洋平さん 会見動画公開中

先月死去した衆院議長や自民党総裁などを務めた河野洋平さんは過去6回クラブで会見しています。このうち、2015年6月シリーズ「戦後70年を語る」での村山富市元首相との対談、17年9月の会見の動画をそれぞれご覧いただけます。15年6月の会見は詳録(文字記録)もあります。



今後の行事予定 (7/2現在)

27(日) 15:30～16:30 10階ホール
ジュリア・ロングボトム 駐日英国大使 会見

会報委員会

委員長＝榊原 智
委員＝飯山 雅史 勝田 洋人 鴨下ひろみ
菊池 正史 高橋 清子 田中 成之
辻 篤子 遠山 昭弘 成田 浩二
森 一徳

(事務局：西村志織 本庄五月)

☎03-3503-2729 FAX 03-3503-7271

撮影：平川 義之（毎日新聞社写真映像報道部）



歓迎式典でフィリピンのマルコス大統領を出迎えられた天皇陛下＝5月27日午前9時26分、皇居・宮殿東庭

端緒に抵抗せよ

それにしても、いやあ、よかった。この写真がカラーで。漫画家のしりあがり寿氏が「地球防衛家のヒトビト」で警告したように、日の丸を白黒印刷したら近い将来損壊と認定されるかもしれないのだ。

「他人に不快な念を抱かせる」ことが刑罰適用の構成要件になる。当局が「白黒の日の丸を見て国民が不快な念を抱いた」と認定すればそれでおしまい。筆者や編集者はお縄になり、日本記者クラブには家宅捜索がはいるかも、だ。でも、ちょっと待ってくれ。電車の中で思い切り鼻をほじくるオジサン。「歩きスマホはやめましょう」という駅のアナウンスの下、携帯を凝視してぶつかってくる若者。虫唾が走る作り笑いを振りまく政治家。世に不快の念を抱かせる輩は数いるのに、なんで怪しげな官製の権威を損壊した者だけが処罰の対象になるのか。

米ニューヨーク州ベセルの草原で、ジミ・ヘンドリックスが「星条旗」を弾いた時、聴衆はその感性に震えた。「神聖な国歌に対する冒涇だ」との批判もあったが、エレキギターの特性を最大限に引き出しながらの「正調の損壊」は歴史に残る名演となった。誰かが不快に思うかは問題ではない。あいまいな基準で国家権力を発動し市民を取り締まろうと発想する為政者の存在こそ問題なのだ。

イエスは自らの運命を予見し弟子たちに「心騒がせるな」と言ったのだそうだ。でもそんなこと私には無理。毎朝、新聞を読むたびに、胸の内は波打ち、舌はざらつく。生業とする表現の自由が国家によって侵されるかもしれないのに、「心騒がせるな」なんてできない。

ならば、ドイツの神学者マルチン・ニーメラーの説論に従い「端緒に抵抗せよ」である。立法がどうなるうとも。

（時事通信社出身 軽部 謙介）